

開講日	2019年春期 木曜日 18:30-20:00	講義場所	研究棟11階 講義室A
コースディレクター	名古屋市立大学大学院医学研究科 地域医療教育学 教授 赤津裕康		
科目概要 および 期待される 成果	【概要】2025年が間近に迫ってきました。しかし、2025年はいくまで通過点であり、本当に我々が取り組んでいかないとけない諸課題が矢継ぎ早にやってくるのは、以降の20～30年間と言われています。少子高齢化により子供や若者層がマイノリティーとなる時代になります。多死・人口減少がさらに加速していき、労働人口が減少します。その中でいかに我々がスマートに日本の将来を切り開いていけるかが問われています。老化・加齢研究はまだ未解明の問題が山積しています。大学病院も患者層の高齢化が進み、認知症の方の比率も増えてきます。本講座では、高齢者の身体・精神的特徴を学び、健やかに人生を全うする方策を模索されている先生方をお招きし、高齢者医療と老年医学の基礎と現状を学びます。また、Cure からCareへの政策的取り組みとしての地域医療・在宅医療、地域包括ケアについても学び、今後の超高齢社会の根底を支える方向性を学びたいと思います。【期待される成果】老年医療、老年医学全般的知識の他、現場での現状、今後の社会構造の変化、老化・認知症などにおける最新の国内外の動向、研究の成果など、幅広く知識習得ができ、今後の超高齢社会に対応できる医療人としての幅広い知見を身に着ける事が期待できます。		
目標とする 資格	医師、歯科医師、薬剤師、看護師、ケアマネージャー、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、管理栄養士、社会福祉士、介護福祉士、心理士、保健医療行政職		

サブカテゴリ	No	タイトル	講義概要	開講日	講師(所属)
L-1	1	イントロダクション：地域・在宅医療と老年医学の関係性と高齢者医療への科学的アプローチ	課題や疑問が山積している高齢者への医療提供に対して、科学的にアプローチし、超高齢社会に対応する医療提供やケアのあり方を、実際の臨床研究の実践、成果発表、臨床応用という視点から実例を交えながら紹介、共に考えます。	4月11日	教授 赤津 裕康 名古屋市立大学大学院医学研究科 助教 間辺 利江 帝京大学医学部衛生学公衆衛生学講座
L-2	2	認知症基礎研究の歩み：根本治療薬の開発を目指して	認知症、特にアルツハイマー病の基礎研究に従事してきた経験をもとに、本講義では、認知症基礎研究の歴史に触れつつ、治療を目指した創薬開発研究の最新の動向や画期的な診断技術の開発について紹介する。	4月18日	佐原 成彦 国立研究開発法人 量子科学技術研究開発機構 放射線医学総合研究所 脳機能イメーシング研究部 脳疾患モデル開発チーム
L-3	3	フレイル予防を通じた健康長寿のまちづくり アクションリサーチの視点から	健康寿命延伸のために『フレイル』概念を踏まえ、単なる身体の衰えだけではなく、心理面や社会性(生活の広がりや人とのつながり)も深く関わりながら衰えていくことを認識する必要がある。その予防のために、住民が栄養(食と口腔)・運動・社会参加の3つの柱を三位一体として意識でき、かつ快活な地域づくりを目指したい。	4月25日	教授 飯島 勝矢 東京大学 高齢社会総合研究機構
L-4	4	病理解剖からみた高齢者疾患の特徴	高齢者で頻度の高い認知症、脳血管障害、虚血性心筋障害、閉塞性肺疾患、骨折、前立腺肥大などの疾患について病理解剖から見た所見を画像・写真を用いて概説し、これらの疾患の予防のために大切なことを考える基礎資料を提供し、現在の医療における病理解剖の重要性についても触れる。	5月9日	橋詰 良夫 医療法人さわらび会 福祉村病院 神経病理研究所 所長
L-5	5	福岡県久山町での取り組み	福岡県久山町では、ひさやま方式という名称で町、九州大学、および地域の開業医の3者が連携して住民の健康管理を行っている。超高齢社会を迎えたわが国は認知症患者の急増などが大きな問題となっている。本講義では、ひさやま方式の健康管理を通じて健康寿命の延長に必要なものを学んで頂く。	5月16日	助教 小原 知之 九州大学大学院医学研究院 精神病態医学
L-6	6	超高齢社会における胃瘻PEG管理	無駄な延命治療と評判の悪い胃瘻PEG。しかしながらPEGは単に栄養補給法の一手段にすぎず、また長期の栄養管理を要する症例においては良い適応がある。本講義ではPEGの真の適応について再考するとともに、その造設法、合併症、管理法について細説したい。	5月23日	院長 蟹江 治郎 ふきあげ内科胃腸科クリニック
L-7	7	病院を中心とした地域包括ケア～豊田市の中山間地域にて～	豊田市足助地区は少子高齢社会の先進地区である。地域コミュニティの中心であった小学校が統廃合され、かつ過疎により地域づくりの中心がなくなりつつある。健康維持は人々の関心が最も高く、医療、福祉、保健活動がそれを支える。これらサービスが少ないへき地における足助病院の取り組みを紹介する。	5月30日	名誉院長 早川 富博 JA 愛知厚生連 足助病院
L-8	8	認知症高齢者の自動運転と地域での課題	近年、高齢者と自動車運転の問題、特に認知症と自動車運転の問題は社会的にも問題化している。現在、本邦では認知症と認識されれば、現行法でも既に運転が禁止されているが、高齢者、特に認知症の人と運転免許の対応についてはまだまだ医学的な対応や臨床現場への影響は十分検討されているとは言いがたい。そこで認知症の運転と地域での対応の視点から本問題の課題について解説する。	6月6日	講師 上村 直人 高知大学医学部神経科精神科
L-9	9	総合診療と在宅医療 在宅病のベストプラクティス	2018年4月総合診療専門医という新しい専門医制度が始まりました。また、在宅医療は地域においてはまだまだ不十分です。豊田市の豊田地域医療センターでは、総合診療医が在宅医療を行い、地域の在宅支援診療所と在宅療養支援病院をつなぐ役割も行っていきます。総合診療と在宅医療と中小病院の新しい価値について説明したいと思います。	6月13日	大杉 泰弘 藤田医科大学 総合診療プログラム 豊田市・藤田医科大学連携地域医療学 豊田地域医療センター副院長
L-10	10	認知症における異常タンパク凝集体の脳内伝播	認知症をはじめとする神経変性疾患においてタウ、 α -シヌクレイン、TDP-43など、神経細胞内で形成された異常タンパク凝集体がプリオンのように伝播し、病理が広がるという「異常タンパク凝集体の脳内伝播仮説」が提唱されている。本講義ではタウの伝播モデル動物を中心に解説し、認知症の新規治療法開発の方向性について考えます。	6月20日	細川 雅人 東京都医学総合研究所 認知症プロジェクト 主席研究員
L-11	11	介護予防における自治体病院の地域への取り組みとリハビリ専門職の取り組み	蒲郡市における「脳トレ・筋トレ実践教室」の取り組みを紹介するとともに自治体病院である蒲郡市民病院の役割を考える。また、理学療法士・作業療法士・言語聴覚士のリハビリ専門職3団体の介護予防等地域づくりへの現在の活動を基に今後の可能性についてお話をさせて頂く。	6月27日	星野 茂 蒲郡市民病院診療技術局長兼リハビリテーション科技師長(理学療法士) (公社)愛知県理学療法士会理事
L-12	12	診療ガイドラインと医療情報	主傷病の他、高齢者総合評価、老年症候群などの評価から+プロブレムリストを挙げ、診療ガイドラインに従い、ケアチームにおいて共有する流れを、30年度診療報酬改定、最近の電子カルテ、クリニカルパス、地域連携の話題を含めて解説いただく。	7月4日	講師 大西 丈二 名古屋大学大学院医学系研究科地域在宅医療学・老年科学
L-13	13	瑞穂区における地域包括ケアシステムについて	厚生労働省は、2025年を目途に、高齢者が可能な限り、住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう地域の特性を活かした「地域包括ケアシステム」の構築を推進しています。本講座では、瑞穂区の取り組みについて、その現状をお話します。	7月11日	事務局長 田端 敬則 名古屋市瑞穂区社会福祉協議会
L-14	14	終末期のコミュニケーション～葛藤によりそう医療職者へ～	終末期に患者自身は心身ともに不安定になり意思決定は動揺するし、医療者も翻弄され、十分なコミュニケーションをとるどころか、チームが成り立たなくなることも決して少なくない。終末期にACPを推進するうえで、医療者が抱える苦悩を軽減し、よりよい生き方死に方への支援を行うには、終末期に応じたコミュニケーションのスキルアップが求められている。	7月18日	院長 家田 秀明 みずほ在宅支援クリニック
L-15	15	まとめ	超高齢社会の進展に並行して加齢により認知機能低下を伴う人の人口比率も増えていきます。認知症の概念を理解しつつ、自分がそうなったときの終末期の希望をアンケートを交えていき、本講座のまとめとしたいと思います。	7月25日	教授 赤津 裕康 名古屋市立大学大学院医学研究科